

報



會

會 岳 山 本 日

82

月 二 十 年 三 十 和 昭

反射と屈折

—主として會報八〇號に就いて—

廣 瀬 潔

黒田孝雄氏は「山の人達」を「とかく因習に捕はれ易く排他的のときへ考へられる」と評してある——「山の人達」は黒田孝雄氏を「とかく因習に捕はれ易く限定（出版）的のときへ考へられる」と云つてゐる。

浦松佐美太郎氏は「山の人達」は「種々雑多な山に關係のある文章を集めて一冊にしたものであつて、大部分は一度發表されたことのあるものである」と書いてゐる——「山の人達」は「日本山岳會は種々雑多な山に關係のある人々を集めて一つの會にしたものであつて、大部分は一度は盛んに登山したが、今は餘り山に登らない人である」と云つてゐる。

黒田孝雄氏は高橋文太郎氏の「山の人達」について「眞摯なる態度」と賞めてゐる——だが浦松佐美太郎氏は「まことに杜撰」とけなしてゐる。

山岳會役員の色分けを瞭り會報に屈折して見せた吉澤一郎氏は「ブリズム」である。——讀者は黒田、高橋、浦松、藤島、額田、田口と餘りにも色彩の違つた日本山岳會スペクトルを啞然として眺めてゐる。

日本山岳會役員は理論闘争に忙しい——京大旅行部は蒙古遠征に實踐的だ。山岳會から遠征隊に慰問袋を送つたと云う話は聞かない——だが遠征隊からは山岳會へ「包」の便りを送つて來た。

吉澤一郎氏は「盛岡高農團體登山の員数を四五三名」と報じてゐる——だが日本山岳界を代表してゐる日本山岳會の現在會員實數を知りたがつてゐる人が多い。

「日本山岳會で毎年發行してゐる『山日記』にはその時の現在數を瞭り載せてあります——編者註」

藤島敏男氏はフランスのカラコラム遠征費資料を「別に整理もせず」「雜然」と日本山岳會に取次いでゐる——だが日本山岳會がヒマラヤに遠征隊を送るのはいつのことか。

田口一郎氏の「スキスから」の登山便りが會報に載つてゐる——だがそれは藤島敏男氏の書信であつて日本山岳會に宛てたものではない。「事實はその通りであるが個人宛のものでも一般的な内容を持ち、且つ個人間に差支への生ぜぬものなら載せてもいい」と思ひます——編者註

中司文夫氏は小集會講演報告に「最近フランスから迎へ、歸した、藤島

敏男氏云々」と書いてゐる——これでは藤島氏が日本人だかフランス人だか分らない。「綴方教室」でも讀んで、もう少し文章を研究して欲しい。

藤島敏男氏は幻燈で「アチラ」の山を紹介し、塚本閑治氏は小型映畫で「コチラ」の山をアチラへ紹介してゐる——幻燈と映畫では人形芝居と新劇ほどの差がありアチラとコチラでは方向がまるで反對だ。

吉澤一郎氏は「軍機保護法の記事」を山日記から會報に轉載してゐる。——日本山岳會員で會編纂の山日記を買はない會員がそんなに深山居るのだからか。

「山日記」を買ふ會員は實數の三分の一だけ、而もそれを買つた人でも「軍機保護法」の記事を一字残さず讀んでゐるのは角田氏と私と植字工氏の三人位のものでせう——編者註

谷博氏は「マロリーはヤングハズバンドの少年、だつたに違ひない」と云う有名な與太を紹介してゐる——「可愛らしい中學生だつた」谷博は今西錦司の少年、だつたに違ひない。なんて飛んだ與太が飛ばないとも限らない。

袋一平氏の「エリブルース」と望月達夫氏の「ヒマラヤンニュース」は所謂日本山岳會員がなくて讀者は

助かる——海拔四、二〇〇メートルのエリブルースや、二〇、〇〇〇呎以上のヒマラヤまでは日本山岳會の體臭も流石に届かないとみえる。

目 次

・ 反射と屈折——主として會報八〇號に就いて

・ ジョン・モリス氏の講演

・ 白馬雜談

・ 一九三三年の攻撃

・ Camp Sixより

・ 一異見

・ 額田氏に對し——

・ 二つの週行

・ 大蛇尾川と滑河内

・ 會員通信

・ 二つ

・ 陸地測量部出版地圖目錄

・ 會務報告

額田敏氏は「日本山岳會員の緊密なる關係が、その精神が遲緩する様な事があつてはならぬ」と力んでゐる——が役員は「山岳」を遅刊し、會員は「會費」を遅滞してゐる。會

報から「會費の拂込未済の方は速急御願ひ致します」と云う督促文が消え去るのはいつのことか。

藤島敏男氏から珍らしく筆者宛手紙が來た。「早く會費を納めて下さい、さうでもしなければ富士山が泣きます」と書いてある。——どうか。泣くのは山岳會だらう。富士山には涙腺が無い。

山岳會の事務所へ會費を納めに行つたら、茨木畫伯がおられた。「先生は富士山の繪をお畫きにならないのですか」と伺つたら

「富士は山が大きい過ぎて描けない」と云はれた——これは本當だ。世界中何處を探したつて、富士山より大きいキャンパスは無い。

誰です。茨木畫伯のやうな大きい額も無い」なんて、餘計なことを云うのは……。え？ 聞き違ひだつて、何、「茨木畫伯のやうな大きい心の持主はない」、あゝ、それならいゝ。

×
 ×
 ×

「冬富士で事故があつた」と新聞記事が出たら、中司文夫氏が馳けつけて来た——「君のところへ来れば解ると思つた」惶てるな。「冬富士で滑つたら、廣瀬潔に届け出よ」なんて法律はない。六法全書をあけて見よ。

その位なら山日記に「事故があつたら日本山岳會に届け出よ」と書いて置いたらどうか——尤も日本山岳

會に急報したつて救難や見舞ひには
來てくれない。叱られるのが關の山
だ。

日本山岳會は遭難対策を募集した。だが鶴呑みにした儘不二屋ビルに眼ばかり光らせて桌のやうにうづくまつてゐる――

文部省や厚生省は鳩ボツボとお手
手つないで「山岳遭難防止の夕」に
街頭へ進出して來た。

浦松佐美太郎氏と藤島敏男氏は山の繙譯書について誤譯を指摘した。結構なことだ。山岳界清掃のために

——だが山岳遭難対策と山岳書の誤譯指摘とどちらが急務か、書物と人間の生命とはどちらが大切な。

×

×

×

會費を納めて歸らうとすると、吉澤一郎氏に捕つた。「會報に何か書け」との命令だ——しかしどう考へても、日本山岳會の會報にも、を書くほどの實力はない。だから強いてペンを握ると、苦しまぎれにこんな

×

×

×

浦松佐美太郎氏は「期する所あつて」「山の人達」の批評を書いた――筆者は別に「期する所なく」これを書く。

ジョン・モリス氏の講演

吉澤生

十一月二十四日の夜六時から稻門
山岳會の主催でジョン・モリス氏の
ヒマラヤ、殊にエヴェレストに關す
る講演が朝日の七階で行はれた。

私達學校關係のものも十人許り招待を受けたので喜んで出掛けて行つたが色々得る所があつた。ヒマラヤ機けとでもいふか童顔に愛嬌たつぷりで通譯をつけて細い所を極く打寛ろいだ態度で悠りと解りよく話されたのには好感が持てた。ノンクライミングメンバーとは云ひ乍らあれだけの大部隊の糧食其の他の運搬を三度

も引受け滞りなく遠征を行はしめた
實際の経験者から、直接に話を聞く
といふ事は何と云つても得難い機会
と云はなければならぬ。其の點陷
門山岳會の御骨折りに感謝すべきで
あらう。通譯氏は全然山の門外漢で
山の言葉を知らなかつた様だが時々
本人の云ふのとは宛で反對な譯をし
てゐた事もあつた。肝心の言葉を飛
ばしてすふ様な場合もあつた、譬へ
ばノースユルの西側は *laden porten*
には難しいといふのを單に *porten* だ
けにしてつてゐた。之ではシェル
バが憤慨する。が之も山を知らない
人には無理かならぬ事であると思ふ
講演の合間に質問を許された。テ
イルマンは幾つ位ですか といふ質
問に答へた折、うつかりモリス氏自

身の年を明して予ひ、之は私が日本へ来て初めての自狀ですと云つて笑つてゐた。モリス氏はティルマンも私と同じく三十九歳でせう、と云つてゐた。スマイスとシブトとは逆も仲が悪くて始終喧嘩許りしてゐるので結局ティルマンが隊長になつたのだ、といふ様な内輪話までやつて呉れた。

氏一箇の持論かどうか知らぬが、ヴェレスト遠征隊の登攀隊員の年齢は二十五六歳から三十二歳位までの間を最もいゝとしてゐるらしい、此の意味に於て、と前に並んでゐる學生連を指して、まだ諸君には二、三年早い様に思へる杯とも云つて笑はせる。

私は幻燈（撮影機は日本山岳會のを貸した）を撮す一寸前に丁度氏が傍へ來られたので、Roubin 氷河の正しい發音を聞いた所、Kはサイレントであると瞭り説明して呉れた、同様に Vase（薔牛）も Kはサイレントで單にヤアだらしく、Nanga Parbat も日本では色々に發音されてゐる。

直接教えを受け得るといふ事は此の上もない喜びである。之からはチヨイ／＼御宅に御邪魔して疑問の點を片端しから片付けて行かふと思つてゐる。尤も之は英國人の發音であつて土地の住民のはもつと異ふのではないかなど、云つてゐたきりのない話で先づ大體の所で我慢して置かなければならないと思ふ。日本だけで通用して實際印度へ行つて私達は之々の山に登ると話して見ても向ふの人に通じない様では全く困る、こんな譯で現地にあつた實際の経験家の發音なら大體大過なしとすべきであらう。

此の他炊事用のアルコールの事
蓄音機のこと色々参考になる事柄を
述べられてゐたがこゝでは省く。氏
は文理大の講師として三年も東京に
滞在される豫定であるから惶てする必
要はない、年でも代つたらネバール
の話とか印度生活十五年の憶ひ出と
か云つた様な演題で一席語つて貰つ
たらと思つてゐる。

幻燈のスライドを一枚逆さまに入

正されたが、誰でも知つてゐるエヴ
イレストの北面の寫眞を左右より違
へて宛でネパール側からの透視圖の
様になつて了つたのがあつたが之は
何も云はず説明されてゐた、こんな
所を餘り氣にしない所流石に大陸的
だなと思つた。兎に吾等々としても
一度はその風貌に接して置く必要が
あろう。

(以上)

(以上)

談 雜 馬 白

中 島 杏 子

指すのだらうし、餓鬼は針ノ木以北、爺子岳邊を漠然と指すらしい。爺岳は大體今日の白馬鑓の事とは判じられるのであるが、設するに足る信州側の文獻説話が少しも手に入らないので、確言することも出来ない。

白馬と云ふ山名の用ひられた最も早いものは明治十四年松本中學校教諭の松原氏が大町の元木場役所勤務の堀井有忠翁から聞かれたと云はれ、次に同十六年には大町小學校長渡邊氏安徳郡長窪田氏が相伴ひて登山せられた由傳ひて居るが、然も此の以前、既に明治十三年版の「信濃明細全圖」には白馬岳の名が立派に記入

會員大會豫告

日時場所 十二月十四日午後六時
於日本橋商工クラブ
講演者 横山健堂氏

白馬連峯は今でこそ有名過ぎる程の名山揃ひであるが明治中葉迄は知る人も少く登高する人も稀れて山名も麓の細野邊りでは連峯を一括して單に西岳と呼んで居たと云ふことだ只このうちで大日岳と別名のある小連峯ばかりは百五十年前頃(天明時代か)其頂上に大日如來を祠つたので山名がかく發生したと云つて居るが此の名稱も文化天保頃の信濃國の各繪圖を開いて見て其山名を求むることが出来ないもので頗る心細いこの時代の繪圖には白馬から針ノ木峠までの間に山名としては鑓岳、ケンノウ岳、マサガ岳、セイクラベ岳、餓鬼岳の五つがあるに過ぎないこの中でセイクラベ岳は二ツの頭がセイクラベして居る鹿島槍のことを

してある。殊にこの繪圖は明治七年頃の縣下概測圖を下圖として居る關係上白馬の名稱の發生はまだずつと早いものと思ふ。其後明治十八年二月版行の「長野縣管内信濃國全圖」にも位置が多少南方へ外れて居るが立派に白馬岳の記入がある。この二つの地圖の記入から推して代馬から白馬になり公用等の文書に記される様になつたのは御維新前からの事ではないかと思ふ。麓の人達にとつては代馬だろうが白馬だろうが呼び方に變り無く御役人や偉い人のやる事には異議も無く何の不都合も感じ無かつた譯である。

この連峯には嚴めしい山名は少い麓の人達の呼び馴れたと思はれるシロウマやセイクラベや祖父などと云ふ通俗な呼び名を持つて居るのは懐しい限りだ。これまた年古くる人の注目から免かれて居て人跡に遠ほざかつて居たといふ證據だ。

これに反して越中側では三百年も前から奥山廻り役が入り込んで居た爲め之等の山頂には總て立派な山名が與へられて居た。後立山を第一として連華岳、錫杖ヶ岳、ミカゲヶ岳、赤鬼ヶ岳、餓鬼ヶ岳、地藏岳等仲々信州側の山名に比して抹香臭さく嚴めしい。

さて御留山の越中方面は姑らく措き信州側は何故に昔から人跡に遠ざかり實生活の欲求からする登山も信仰上からする登山も無かつたのか近世岳人には淋しくも不可解となす所である。それに就いて諸家は色々な理由を上げて居る。其是非は此處では論じないが、今、一つ新しい理由を發表したい。

それは加賀藩の國境警備の嚴重さから来る後立山連峯への登高難ではなかつたかと云ふことである。加賀藩では寛水の頃奥山の區域を定め慶安以後奥山廻役をしてこの信越國境線上の山頂を嚴重に警戒せしめた。この爲めに信州側から登山する獵夫や盜材者や密漁者は隨所々に發見せられ小屋は焼かれ伐木は沒收せられ犯人は斷罪の浮目に會ふと云ふ譯でこの山々に對する山麓の者の恐怖は至大なるものがあつたろうと思ふ。

この結果は又一方奥山廻役の警戒を刺戟して餓鬼後立山迄も年々の山廻の範圍に這入り、針ノ木や連華の頂上に境界木札まで建てられる事になつた。其後も斷へなかつた狡猾な密行者も三十名を越す奥山廻りには齒が立たず漸次信州側の人形を斷つてしまつた事と想像される。尤もこの間信州側の地勢の特に急峻な事や山頂の創立の狀況が彼等に不利であつた事も大いに關係しよう。さて又他方信濃側の宗教的登山に就ては之等は大いに頂上に信仰の對照物を安置する例であるが信州側は登路も急であり頂上は創立して居る故に餘地は全然なく比較的餘地のある越中側は早くから奥山廻りの占據する所となつて居て全く手の施し様もなかつた登路の開拓、奥宮の建立は越中側の境域を借らなくては思ひもよらぬことは現境に照してよく御了解になると思ふ。

大體加賀藩は延寶時代白山の頂上神祠を巡つて越前側と管理權を争つて敗れたと云ふ苦汁を甜めて居る丈けこの奥山の境界山頂には他國の紛らはしい後患をなす様な一切の建設物を實力を以て排除したと見るべきである。奥山廻りの巡る全奥山御境目筋には一つの奥の院も一人の開山僧侶も見られない。

これに反して越後と信濃、飛騨と信濃の境の山には南裔和尚も普賢行者も幡龍上人もどん／＼登つて居る信州の人士も立派な山相を持つ主峯鑓岳を離れて國內の大日岳に大日如來を安置したのは危険な越中境を特に避けて安全を期したと云ふ其間の事情を問はず語りして居るではないか。この近づき難い山、怖ろしい山と云ふ觀念が明治になつても失せず山麓の人々の胸奥に何かしら根強く残つて登山を禁忌したのではないかと思ふ。この爲め明治になつても單に西岳または西山と無關心的に漠然と呼んで居たのであらう。越中側でも奥山が藩政時代長く禁斷嶺であつたために明治になつても一般人士はこの山々に無關心で後立山一帯の越中側の山名もすつかり忘れ果てしまつたと云ふ例がある。

今日後立山方面の越中側稱呼は兎も角近代早く拓かれた信州側の古名たる鑓ヶ岳、ケンノウ岳、マサガ岳、セイクラベ岳、餓鬼岳は何處に該當するか現に之等の古名の持つて行き所が宙に迷つて居るのは實に尙がゆい。又白馬、唐松、大黒、五龍等の現在の山名の由來も前記の古名と如何なる關係にあるか、どうして變化して來たか、又山麓の口碑傳説と絡んで何んな位置にあるかは未だ明らかになつて居ないが、之等は是非我れ／＼岳人の手によつて一日も早く鮮明にせねばならぬ事柄だと思ふのである。是に就て僕は信州方面の隠れた郷土山岳文獻の發見に至大の期待をかけて居る次第だ。



一九三三年の攻撃(五)

—エヴェレスト—

“Camp Six”より

吉澤生

幾時間といふもの、全く靴紙の摩擦にのみ頼り、搦て加へて高度による肉體的精神的の疲労倦怠といふものがある。恚ふいふ状態の許に假借なき一枚岩の上に曝されてゐる事はそれだけで既に、假令それらのものに旨く對抗し得るとしても、體力と技能以上の何物かを必要とする事は多言を要せぬ。

頂上は岩帯の上にもう目と鼻の距離でしかない、高さにすれば僅かに一千呎であるが此の疲労では宛て永遠の距りがあるにも等しいものであつた。稜堡の上に又稜堡、一枚岩は一枚岩と、岩は層々と重なり合ひ錯綜し合ひ、その淡黄色の稜角は物凄く濃青の空に喰ひ込んでゐる。

稜線からは羽毛の様な白い霧が音もなく流れ去つて行く、恰も絶ゆる事なき火山の蒸氣の如く。然し私の立つてゐる所には少しの風もない、

太陽はこの洞穴に灼くが如くに照りつけてゐる、その癖、寒冷な空氣は少しもそれにより暖められてはゐないのだ。雲が段々集つて來たがそれは數千呎も脚の下だ。雲と雲の合間からロンプ氷河が覗いてゐる、一番上の方は眞白になつて居り、下るに従ひ表面が荒れて夥しいセラツクに分解され、その下方では又巨大な堆石がもれ上つてゐて宛て世界中の土方が其處に集つて目茶苦茶に掘り返した様に見えてゐた。ロンプ溪谷はその儘北方へ延び西藏の金色の丘へ向つてゐる。ロンプの僧院が見える、豆粒程の家々がチョツピリと寄り集つてゐるのだが大氣が澄み徹つてゐるのでどんな微細な點でも瞭りと眼に映つた。

私が覺えてゐるのは此のロンプの印象だけで、他の事は全然記憶から消え失せてゐる。私の位置は餘りに高く、視界は餘りに茫漠としてゐて細い點を記憶するには脳髓が疲れ過ぎてゐた。私の高さに挑むものは何一つ見えぬ、下界は餘りに低かつた、再び其處へ降り立つ事は全く不可能にさへ思へたのである。人間の頭脳はこういった見通しを理解する爲めには神の靈感をうける必要がある。私の脳神経は疲労した身體に結びついてゐて、酸素の缺乏から肝要な神経作用は總て弛緩して了つてゐたのだ。ソマヴェルが此の景觀を見て敘した「神の光景」といふ言葉は最簡最適なものといふべきであ

る。私は全く本能的にカメラを出した、が撮つたものは全く詰らないものであつた。

私は退却の痛苦に就ての詳細は述べる事が出来ない。エヴェレストで敗退せしめられた者には一つの共通點がある。それは之以上もう突進する必要はないのだといふ慰安が他の總ての考慮を壓倒して了ふといふ事である。事實エヴェレストの最後の一千呎は最早單なる肉體的な問題ではない、假令人工的な補助なくしてその頂上に達し得たとしても、人は唯己が人間としての脆弱さと恐怖すべき自然の景觀の上に神の如くに立たざるを得なくなるであらう。唯、人は己が裡に及び外に存在する神秘なる力によつてのみ、死にも比すべき疲労に打勝ち、且つ最後の勝利を得るに過ぎないのである。

非常に高い所で、而も身心が意識せぬ内に倦怠状態に陥つてゐた場合、登攀者が自分の身體を進めるのは知覺に頼るよりは潜在意識に頼る方が寧ろ多い、といふ考へを裏書きする様なものであつた。従つてエヴェレストの頂上に達し得る意志は是が非でも登らなければならぬといふ強固なる決意が先行し、之により一層強められる事が何よりも大切なのである。エヴェレストが決して英國では登れるものでないといふ事は今更喋々するまでもないと思ふ。此の寫眞を撮つてから私は何か食べなければならぬと思つた。私は少しも空腹を覺えてはゐなかつた、事實食物といふ事を思ふだけでも此の上なく厭はしいものであつたのだ私の口はすつかり乾いて居り舌は革の様にこばつてゐた。私がポケツトから薄荷菓子の一片を引張り出したのは全く義務に縛られて、といった方が當つてゐる。

爰で私は“Everest 1933”に述べられてゐる不思議な事件に就て話をしなければならぬ。

エリックと訣れてから私は誰かが私と一緒に居るといふ奇妙な氣持が傍に立つて私自身を凝視してゐるといふ、精神的な分離作用に就て觸れて置いた。以前私はドロマイトの岩山から墜落した時に同様な感情を持つた經驗があるが、之は長い墜落を経験した登山家には決して珍らしい

事ではない。私の傍に誰かが居るといふ感情は、詰り酸素の缺乏と非常な高度に於てたつた獨りで登攀してゐるといふ、精神的な又肉體的な壓迫感に依るものではないかと思ふ、然し之は説明ではなく單なる暗示位の程度で述べてゐるに過ぎない。

此の『妖怪』は仲々確りしてゐて親し味があつた。それと一諸に居ると何等の淋しさも感じなければ害も勿論なかつた。妖怪は常に私の傍に居て雪深い岩板の上の孤獨な登攀を護つて呉れた。ふと立停つてポケツトから薄荷菓子を取り出した時、それが餘りに近くに而も瞭りとしてゐたので私は、本能的に菓子を二つに割つて傍に居るその『同僚』にやううと振向いたのである。

私が再びクルールを横切つた時、下のルートを探つて黃帶を越す方がいゝといふ事は瞭らかであつた第一段階の西にある棚の傾斜は一寸凹狀を爲してゐるが斯ふいふ一枚岩の上の一、二度の傾斜は非常に重大な關係を持つてゐるものである。此の棚の西の端は急に切れてその下は直ちにロンプ氷河まで一足飛びになつてゐた。私の歸りのルートは此の斷崖の端に平行した少し上の所にあつた。だが困難は少しもなかつた用心だけして居ればよかつた、然し所々に、棚の上部とは違つて非常に危険な不安定な軟雪があつたので之だけは充分注意しなければならなかつた。

(續)



一 異見

—額田氏に對して—

津 島 生

會報八十號の通信欄に載せられた額田敏氏の一文は些か僕には腑に落ち兼ねる點があるので、茲に改めて僕の意見を申し上げ御示教を乞ひたいと思ふ。山岳第三十三年一號(山岳第三十二年一號も同様と思ふ)の内容は成程額田氏の云はるゝ様に二つの記事共學究的のもので、從來の「山岳」各號に比して最も特異なものであるが、是れを以つて直ちに日本山岳會其ものが「あの様な懐古的文獻計り載せなければならぬ様に氣分が弛るみ原稿が無い」とし「山岳會の存在意義が消滅して居るのではな

いか」と迄心配せらるゝのは一寸氏の思ひ過ぎではなからうか。

大體「山岳」は其性質上からか昔から土俗史實的研究や學術文藝方面の作品は至つて少い。稀に「山岳」

の一冊位いは其の方の記事で満たされてゐてもよいのではないかと兼ねて思つて居たのであるが、今迄其例を見なかつた。

それが今同土俗と史實の二つの記事が一冊となつて現れた。山言葉の蒐集完成は本會が先年から努力して居る事業であるし、黒部奥山研究も昨年から長篇であつて見れば、此の二つが偶然合して相當の頁數となり一冊の「山岳」が編輯されたとして「山岳」が現代的な活氣を失つて居ることは實に悲しむべきことにはならぬと思ふ。

假令些少の活氣が無いとしても讀み辛いとしても、之等の蘊蓄のある研究には吾れも一岳人として敬意を以つて一應囁み締めてみる必要がないだらうか、如何。

ヒマラヤ、アンデスさては滿蒙支の現代登高第一線の活力ある記事に伍し、古るき世の登山々岳を研究し廢れゆく土俗を探り、先人故舊の努力の跡を「山岳」誌上に顯現することとは、勿論日本山岳會の目的の一つに含まれて居る筈である。

額田氏の御意見は一面は諒とする事が出来るが、他を一向に無視して居らるゝのは遺憾至極である。

氏は次いで體位向上の問題に言及され「今更體位向上を叫ぶのはお互に憤みたくと思ふのであります。間に會はぬ事です。」と云はれるが、これ又山岳會員皆が皆で十年以上も年

し、一方世間には山を知らない大勢の人々がある、何も日本山岳會員だからとてお高く止つて憤む必要は無いと思ふ、堅忍持久長期建設下では泥縄的でも結構間に合ふと思ふ。我々岳人も國策線上に立つてお互は勿論四方八方に體位向上登山報國の聲高く叫びかくべきだ。何處かの山岳會で「登山報國の夕」を催したとは何時かの會報にも見えた。これこそ額田氏のお好きな活氣ある山岳會の姿だ。吾人は手を拱ひて見送つて居ては絶対駄目。今こそ日本山岳會の大きな姿を世に認識させ、其權威ある指導力を發揮して世の人に山の理解を深めさせ以つて遭難の只一つでも減じ得たならこれ程結構な事があらうか。豈んやそれが時局に應ひ國策に協力し引いては國家に御奉公出来るのだから一石二鳥三鳥だ。額田氏が同感といはるゝ吉澤氏の「時局と登山」をもう一度じっくり讀んで頂きたい。

山岳會の面目問題は他日閑になつたらゆつくり議論を拜聴するとした。因みに額田氏は東京在住で山岳會前理事の肩書がある。氏が所懐を、敢えて通信欄で發表されたのは何かの結果を期待されてのことであらう。僕のこの異議は的外れの感があるかも知れぬが重ねて御示教を得れば幸である。

二つの廻行

—大蛇尾川と滑河内—

事務所へ寄贈される各山岳會の報告、會報杯を見てゐると時々是はと思ふ様な山行記録が載つてゐる。私は爰にその内から二つの特記すべき山行を御紹介しようと思ふ。

その一つは東京市山岳部報第五九號から六一號までに引續き掲載されてゐた大蛇尾川の廻行と下降である。下野から岩代にかけてはまだ隨分取残された様な山や谷がある。大蛇尾と木ノ俣に挟まれた大佐飛山(一九〇八米)は必ずしも深山とは云へないかも知れぬが私は此の山へ登つたといふ人のあるのを聞いた事が無い。星野氏の一行は去る五月末残雪を利用して大蛇尾の上流バツカラ澤を溯り多くの瀧を満喫して大佐飛山の頂を極め次いで鹿ノ又山の東側に

ある西澤を下降し(此處にも可なり瀧があるらしい)バツカラとの合流點からは往路を戻つた。概念圖がないのでその紀行文では地圖の上の何の邊を指してゐるのか餘りピンと来ないが、藪の隠れてゐる残雪期を選べば面白い山行を経験し得られると思ふ。

其の二は山岳巡禮俱樂部發行の「ガムス」第十四號に發表せられたもので富士川の上流早川の悪支流の一つたる滑河内に於ける廻行と下降で四月末から五月へかけての残雪期を

利用してゐる點は前と同じである。パーティは下村、牧野の兩氏。

四月二十八日飯澤から足馴峠を越えて二十九日の十時頃早川との合流點に著いた。入口は手がつけられず北岸の道を踰へて一ノ澤に降り以後河身或はそれに近い所を過つて地圖の北岸高捲き道の對岸にある第二の岩小屋で一泊翌日は滑河内でも最も悪い不動瀧迄の二軒を廻り歸路は北岸の廢道を辿つて元の岩小屋に戻つた。次の日は此の廢道を不動瀧の上まで利用し昨年邊りまで掘つてゐたといふ金の試掘坑や廢屋を見て河身を廻り大崩崖を直登して別當代山の西にある舊新澤峠に出で六萬平を経て本谷の北側尾根の南に當る立石澤を下降(之も可なり悪かつたらしい)本谷に合して往路を岩小屋に戻つた。陸測五萬を一萬にエンラージしてそれに詳細なルートその他の記號を入れた青寫眞は中々よく出来てゐる。然し本文の方にも、此の青寫眞にも時間記録が細かく載つてゐないのはどうした事か。惜しいと思ふ。

陸測五萬の地形圖がこういつた谷では餘り用をなさないといふ事は登山者の常識となつてゐる。吾々はヨリ正確な地圖を發行して貰ふといふその爲めだけにでも、今後大いに此の方面の研究踏査をやつて見度いものと思ふ。

(I・Y生)



會務報告

十一月定例理事會 並に役員總會

十一月十日 午後七時 於虎ノ門
本會事務所

出席者 木暮 冠 島山 木村
藤島 黒田 角田 島田 高橋 加
藤 野口 石原 中司 吉澤
以上十四名

一、來年度理事の件 本年末を以て任期満了となる茨木、角田、中屋島田、今西の五理事の交代として役員會は推薦すべき新理事五名を選定す。

一、「山岳」を年刊とし「會報」を擴張するの件 從來よりも本件に就ては種々考慮をめぐらし居りしものなり、要は會計並に人的問題にして之が解決の見込さへあらば一般に異議なき模様。

一、茨木、角田兩氏を評議員に推薦するの件 出席評議員別室に於て之が評議を行ひ來年度より右兩氏を評議員に推薦する事に決定。

一、「山岳」第三十三年第二號の件 黒田氏より目下の進行狀態報告。

一、來年度豫算の件 郵税値上げに伴ひ通信費を倍額とする事以外大體本年度の儘を踏襲す。

一、會員大會の件 十二月十日前後日本橋商工クラブにて開催の豫定會計報告、會務報告に續き正七時より講演、之は横山健堂氏に冠評議員より依頼の筈。

一、社團法人の件 加藤、中司兩氏に調査依頼、一層慎重に考究する事となる。

以上 (吉澤)

關西支部來室報告

七月より十月までの分を示す。

月別	會員	會員外	集會		計
			回数	人員	
7月	47	44	3	42	133
8月	52	40	5	72	164
9月	45	38	5	62	145
10月	42	43	4	60	145

集會利用團體は學聯OB一同、山の集ひ三同、エーデルワイス三同、烏丘スキークラブ一同、浪高スキークラブ一同他なり。

退會者

一〇五 三重縣 上田 幸吉

新着圖書

旅路 N・H・C 十一月 關東旅行クラブ
日本ハイキング俱樂部

白峰	十一月	大阪探險俱樂部
横濱山岳會々報	十一月	同會
歩行	十一月	獎健步行會
M・M・S	十一月	明峯山岳會
はひまつ	第九號	俣松山岳會
會報	第十一號	東京登歩溪流會
頂	一ノ八	頂山岳會
會報	十五ノ四	關東山岳會
アルカウ	十一月	東京アルカウ會
旅の趣味	十一月	同會
山幸	十一月	阪神山岳會
岩雪崩	十一月	I・Mクラブ
會報	十一月	東京旅行クラブ
ツリースト	十一月	J・T・B
山小屋	十一月	朋文堂
みなかみ	十一月	奈良山岳會
山小屋俱樂部々報	十一月	朋文堂
會報	十一月	東鐵やまをとこの會
名古屋山岳會々報	十一月	同會
東京市山岳部報	十一月	市役所山岳部
臺灣山岳樂報	十一月	臺灣山岳會
趣味登山會々報	十一月	同會
ベデスツリヤン	十一月	關西徒歩會
山旅	十月	山旅同好會
京都山岳	十一月	京都山岳會
國立公園	十一月	同協會
會報	六ノ四	八王子山岳會
ガムス	十五號	山岳巡禮俱樂部
旅の趣味	十二月	旅の趣味會
會報	十一月	魚市場山岳會
地學雜誌	十一月	東京地學協會
G・R・K	十一月	がくれい會
因伯民談	十一月	鳥取郷土會
登山とスキー	十二月	同社
Die Alpen, Les Alpes, Le Alpi	10	

Planinski Vestnik	10
Appalachia	10
Bulletin du Club Alpin	4
Tchecoslovaque	11
The Mountaineer	10
The Geographical Journal	10
Natural History	10
S. T. F.	10

寄贈圖書

登山と植物 武田久吉著 成美堂書店殿
山の魂 石一郎譯 石一郎氏
圖說新スキー術 馬場忠三郎著 三省堂殿
購入圖書

“Blank on the Map” by Eric Ship-ton, Shaksam Expedition, 1937
“Himalayan Assault” The French Himalayan Expedition, 1936

會報投稿規定

◇山岳に關するものなら何でも結構です。
◇會員外にても投稿自由。
◇締切毎月五日頃。但しその月に出るか出ないかわかりません。
◇用紙は自由なれど十六字詰。

昭和十三年十二月十五日印刷
昭和十三年十二月十六日發行

東京市大森區堤方町六一五
發行兼編輯者 吉澤一郎
東京市芝區平町一(二二屋ビル)
發行所 日本山岳會

電話(芝四三)一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者 植田庄助
印刷所 成文堂印刷所